超初級学習者から始める読みの教育
ー日本語１年生１学期目コースでの多読の取り組み実践報告ー

Building Strong Learners: *Tadoku* from Very Beginning
ー　Implementing Extensive Reading (*Tadoku)* in first year, first semester Japanese course ー

ここ数年、北米日本語教育学会では多読（粟野ほか 2012）の実践報告が増えている。多読専門コースや多読クラブの設立（熊谷 2013, 2014; 纐纈 2015; 小島 2016; 吉村・高橋 2016）、また多読を通常の日本語コースに取り入れた例（今泉・ブレント 2016; 野中 2017; 高橋 2013, 2017）など、多読への関心の高まりと共に、カリキュラムへの多読の導入はこの先増え続けていくであろう。

しかしながら、どのレベルから多読を始めたらよいかという問いはあまり議論されていない。日本語コースに取り入れた例として過去報告されたものは、初級後半～中級レベルでの多読の実践報告が多く、初級前半の学習者が多読を実践した例は、多読授業が初級学習者の内的動機付けにどのような影響を及ぼすかについての研究報告だけである（二宮 2013)。これは、クラス全体がひらがな、カタカナ、漢字、基本文法が理解できる日本語レベルに達していることを前提に多読を始めるのが妥当であるという考えに基づくからであろう。一方で、中級レベル学習者の多読の効果について学生の自己評価を質的分析した研究では、学習者が精読や辞書に頼ることに慣れてしまう前に多読をより早い時期から導入する重要性について言及している（Tabata 2017）。また、日本語超初級者でも個人指導型で読み聞かせからはじめ、日本語多読を成功させた実例も報告されており（川本 2012）、必ずしも学習者の日本語力が準備万端の状態で多読に臨まなくてもよいということを示唆している。

そこで、本発表では、米国私立女子大学の日本語１年生１学期目コースでの多読の取り組みを紹介し、超初級学習者から始める多読の取り組みについて、学生の自己評価をもとに、言語面、情意面における効果について報告する。対象は、日本語１年生１学期目と２学期目を履修した21名で、多読を２学期間続けた後にアンケートに回答してもらった。データは質的分析をもとに考察した。

超初級レベルから多読を始めることは、学習者の読むスキルを早期から育むだけではなく、楽しく読む習慣をつけ、教科書の外とのつながりを担いながら自律学習面を養う役目も果たすのではないだろうか。また、日本語カリキュラム全体においては、超初級レベルから読む教育を始めることにより、中上級レベルで教材を読みこなせる学習者が揃ったクラス活動の実現をより可能にするであろう。本発表は、多読をカリキュラムに導入する上で、超初級学習者から多読学習を始める機会を設ける例として、今後、多読の学習者層を広げることに役立つのではないかと思われる。